

研究報告

尾形光琳300年忌記念特別展における美術品鑑賞による癒し効果

— 一回答者の性別、年代、生活の質（QOL）と癒し度との関連 —

木村 友昭¹ 松本 洸² 内田 誠也¹ 山岡 淳¹

抄 録

2015年2月、静岡県MOA美術館において、「尾形光琳300年忌記念特別展『燕子花と紅白梅』光琳アート — 光琳と現代美術 —」が開催された。本研究は、その特別展を鑑賞したときの癒し度と、性別、年代、および生活の質（QOL）との関連を検討するために行われた。癒し度は日芸版「癒し」評価スケールを用い、QOLは10項目版MOAQOL調査票を用いて測定した。調査1では、15人の来館者を対象に、尾形光琳の国宝2点と、現代作家の作品、および対照としての風景写真の癒し度を測定した。調査2では、440人の来館者を対象に、特別展全体の癒し度を測定した。調査1の結果では、光琳の国宝2点の癒し度が有意に高いことが示された。調査2の結果では、癒し度は性別と有意な関連は見られなかったが、年齢、およびQOLとの間に正の相関が見られた。美術館や博物館は高齢者の外出を促し、心理的な満足感を引き出すことが期待されているが、本研究の結果は、それをサポートするものである。

キーワード

芸術心理学、癒し尺度、生活の質（QOL）、高齢者、日本美術

1. 緒 言

内閣府の平成26年版高齢社会白書¹⁾によれば、総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は過去最高の25.1%に達し、2060年には2.5人に1人は高齢者になると推計されている。並行して少子化が進み、いわゆる超高齢社会においては、現役世代1.3人で1人の高齢者を支える社会の到来が予想されている。高齢者の健康を維持し、自立を促すことが重要な課題であり、老人クラブ、および運動や趣味のサークルなどの

役割が注目されている。また、地域高齢者の外出頻度が高いほど身体・心理・社会的側面での健康度が高いことから、外出頻度は高齢者の包括的な健康指標の一つと考えられている²⁾。美術館や博物館などの文化施設は、高齢者の外出を誘導し、心理的な満足感を引き出すことが期待される³⁻⁵⁾。

文部科学省の平成23年度社会教育調査⁶⁾によれば、日本国内の博物館の数は、国や教育委員会から登録・指定を受けたものが1262（うち美術館452）、登録・指定を受けていない博物館類似施設が4485（うち美術館635）であった。商業施設としての美術館やギャラリーなどを含めると、相当な数に達すると推測される。美術館の中には、①多くの美術品を保管し、企画に合わせて展示物の入れ替えを行う、②常設の美術品が中心である、③美術品の保管よりも、美術品を借りて展示したり、巡回美術展に会場を貸し出したりすることが多い、など多様な形態がある。また、特定の作家の展示紹介を目的とした美術館も多い。

¹ 一般財団法人MOA健康科学センター

〒413-0038 静岡県熱海市西熱海町1-1-60

² 日本大学大学院芸術学研究科

〒176-8525 東京都練馬区旭丘2-42-1

連絡先：

木村友昭. TEL: 0557-86-0663, FAX: 0557-86-0665,
E-mail: t-kimura@mhs.or.jp

受付日：2015年8月23日，受理日：2015年8月29日。

これらの多種多様な美術館の中から、登録博物館の一つである静岡県のMOA美術館⁷⁾を取り上げる。MOA美術館は、1982年に開館し、保有する日本美術や東洋美術を中心に展示している。創立者の岡田茂吉(1882-1955)が生前に蒐集したコレクションが中心となっている。代表的な美術品としては、尾形光琳(1658-1716)の紅白梅図屏風(国宝)、野々村仁清(生没年不詳)の色絵藤花文茶壺(国宝)などがある。施設は熱海市の高台に位置し、海を展望することができ、伊豆地方の観光地の一つになっている。また、館内に能楽堂があり、定期的に能が演じられているほか、毎年8月には屋外で薪能が開催されている。

2015年2月、MOA美術館において、「尾形光琳300年忌記念特別展『燕子花と紅白梅』 光琳アート－光琳と現代美術－」と題する特別展が開催された⁸⁾。尾形光琳は、江戸時代中期を代表する絵師の一人であり、漆芸、陶芸、染織の分野にも優れた才能を発揮し、後世の日本美術に大きな影響を与えた。2015年は、光琳が死去した1716年から300年忌に当たることから、MOA美術館は尾形光琳300年忌記念特別展を企画した。

この特別展では、尾形光琳の二大国宝である「紅白梅図屏風」(MOA美術館蔵)⁹⁾及び「燕子花図屏風」(根津美術館蔵)¹⁰⁾が同時に公開された。これらの同時公開は、昭和34年に当時の皇太子殿下(現在の天皇)の成婚を祝賀するために行われた美術展以来、56年ぶりであった。この同時公開の特別展は、同年4月に、根津美術館においても開催されたが¹¹⁾、国宝以外の展示内容は異なった。MOA美術館の特別展では、光琳100年忌と200年忌で紹介された作品を展示するとともに、光琳の影響を受けた現代作家の作品も多数展覧された。本研究では、この特別展における来館者を調査対象とした。

芸術作品を鑑賞したときの心理的な効果は、とくに音楽に関して詳しく研究されてきた。音楽を聴いたときの認知や生理的な変化、いわゆる聴覚と脳内の情報処理について、多くの知見が得られている¹²⁾。その認知された情報がさまざまな感情を引き起こす。その心理変化は、質問紙などによる主観的な測定によって評価できる¹³⁾。個人差や好みの違いなどが考えられ

るので、適切な質問紙を用いて多くの対象者を測定し、統計的な分析が必要である。

音楽と同様に、美術品を見たときの感情も同様に測定できる。そのための質問紙の一つとして、日本大学芸術学部で開発された「癒し」評価スケール¹⁴⁻¹⁶⁾が活用されている。この評価尺度は、美術品、音楽、建築や景観など、さまざまな対象を鑑賞したときの心の状態を測定することができる。これまでの研究で、美術品¹⁷⁾、庭園^{16,17)}、児童書画¹⁸⁾、自然景観¹⁹⁾、および健康プログラムの癒し効果²⁰⁾などに応用されている。これらの中で、児童の書画の作品鑑賞において、高齢者の方が若い人よりも癒し度が高いという結果が示された¹⁸⁾。この調査は、主に対象者の家族(子または孫)が制作した作品の鑑賞だったため、一般化できないという課題が残った。

本研究の主な目的は、尾形光琳300年忌記念特別展において、美術品の展示を鑑賞したときの癒し度と、性別、年代、および生活の質(QOL)との関連を検討することである。とくに高齢者やQOLが低下した人が美術品の鑑賞からどれくらい癒し感を得ることができるか、数値で明示したいと考えた。

2. 方法

2-1 調査1の対象者および手順

2015年2月、MOA美術館(静岡県熱海市)で開催された「尾形光琳300年忌記念特別展『燕子花と紅白梅』 光琳アート－光琳と現代美術－」⁸⁾において調査を行った。

調査1では、15人のボランティアに対し、調査の参加を依頼した。名前や住所など、個人を特定できる情報は収集しないこと、途中で中止しても不利益にならないこと、調査結果は学会などで発表し論文にまとめることなどを口頭で説明し、調査票の記入をもって同意とみなした。調査項目は、性別、年齢、居住地、来館頻度、芸術・文化への関心、作品の好み、日芸版「癒し」評価スケール、および10項目版MOAQOL調査票(MQL-10)²¹⁾であった。

参加者は、最初、公園の風景写真を鑑賞したのち、写真を鑑賞した印象や自身の心理的变化について、日

芸版「癒し」評価スケールに回答した。その後、美術展の会場に入り、尾形光琳の「紅白梅図屏風」、および「燕子花図屏風」、並びに光琳の影響を受けた現代作家の作品（以下、「作品A」という。）に対し、それぞれの印象について、日芸版「癒し」評価スケールに回答した。つまり、参加者は、日芸版「癒し」評価スケールを4回記入したことになる。それぞれの作品の鑑賞時間は参加者の自由とし、作品についての解説は行わなかった。また、参加者は相互に相談することなく、個々に回答した。

2-2 調査2の対象者および手順

調査2では、関東地方および四国地方からの団体の来館者約600人を対象に、調査の参加を依頼した。調査の説明、倫理的配慮、および測定項目は、調査1と同様であり、調査票の記入をもって同意とみなした。参加者は、美術展全体の印象や自身の心理的变化について、日芸版「癒し」評価スケールに回答した。調査1では、個別の作品の評価を行ったが、調査2では、それらの個別の作品を含む全体の評価（ただし、風景写真は含まれない）を行った。美術展の鑑賞時間は参加者の自由とし、全部の作品を鑑賞後、出口で調査票を回収した。

2-3 調査票

日芸版「癒し」評価スケールは、芸術（絵画、音楽など）を鑑賞したときの「癒し」の度合いを測定するため、日本大学芸術学部の松本らのグループによって開発された。スケールは、30の質問からなり、各質問に対し、「そう思う(2点)」「少しそう思う(1点)」「そう思わない(0点)」の3個の選択肢が設定されている。したがって、総合得点は60点満点である。総合得点は、0～14点が「癒されない」、15～31点が「癒されている」、32～48点が「かなり癒されている」、49～60点が「すごく癒されている」と4つの領域に評価される。さらに、2つのエネルギー尺度（自己啓発的エネルギー、治療的エネルギー：各28点満点）と、6つの下位尺度（和、極、浄、潤、弾、空：各10点満点）によって評価される。自己啓発的エネルギーとは、芸術作品が及ぼす精神的清浄や自己開示、至高へのエネルギーであ

り、治療的エネルギーとは、芸術作品の心理的治療、慰めの働きと言える。下位尺度の癒しの内容は、①和（なごみ）：安心感、あたたかい気持でほっとする気分の癒し、②極（きわみ）：自分をより磨き、発展させるエネルギーを感じる癒し、③浄（きよらか）：こころが静かに、清らかな気分になる癒し、④潤（うるおい）：気が晴れ、リフレッシュでき、ゆとりを感じる癒し、⑤弾（はずみ）：こころが楽しく、軽やかな気分、弾む気分になる癒し、および、⑥空（むしん）：何も考えないで、ボーっとしている状態を楽しむ癒しである。

MQL-10は包括的なQOLを測定するために開発された尺度である。10項目からなり、合計得点は40点満点で、得点が高いほどQOLが良好であることを示している。下位尺度は、身体的健康（16点満点）と心理的健康（20点満点）である。これまでの研究で、尺度の信頼性、妥当性、および反応性が明らかにされている²¹⁻²³⁾。

来館頻度については、①はじめて、②二～三回、③四～五回、④六～十回、および、⑤十一回以上、の5個の選択肢を設定した。美術・文化への関心については、①とてもある、②かなりある、③少しある、④あまりない、および、⑤全然ない、の5個の選択肢を設定した。作品の好みについては、調査1において、それぞれの作品について、「好き」「嫌い」「分からない」の3個の選択肢を設定した。調査2においては、全作品が対象の調査であったが、「紅白梅図屏風」および「燕子花図屏風」の好みだけを質問した。

2-4 統計解析

年代、および尺度間の相関は、Spearmanの順位相関係数で分析した。調査1における作品間の評価は、反復測定ANOVA（分散分析）で分析後、Bonferroniの調整を行い多重比較した。また、群間の比較は、ANOVAで分析後、Tukeyの多重比較で行った。調査2の年齢群の比較では、日芸版「癒し」評価スケールの6つの下位尺度について、下記の数式で計算した相対値も分析した。

$$[\text{相対値}] = [\text{下位尺度の得点}] - [\text{総合得点}/6]$$

これらの統計解析は、すべてIBM SPSS Statistics Ver. 20を使用し、有意水準は5%未満とした。

3. 結 果

3-1 調査 1

参加したボランティア15人（男性10人、女性5人）の平均年齢は、48.2歳（16.4 SD）であった。居住地は、静岡県11人、神奈川県3人、およびその他1人であった。これまでの来館頻度は、14人が11回以上、1人が6～10回と回答した。芸術・文化への関心は、6人がとてもある、2人がかなりある、7人が少しあると回答した。

表1に、日芸版「癒し」評価スケールの総合得点および下位尺度得点における作品ごとの平均値、ならびにその検定結果を示す。ANOVAによる検定の結果、すべての得点において有意であった。風景写真を対照として、各作品と比較したところ、総合得点、自己啓

発的エネルギー得点（「自己啓発」）、および治療的エネルギー得点（「治療」）において、「紅白梅図屏風」および「燕子花図屏風」が有意に高い得点であった。6つの下位尺度では、「紅白梅図屏風」は、「極」「浄」において有意に高い得点であった。「燕子花図屏風」は、「和」「極」「浄」「潤」において有意に高い得点であった。一方、「作品A」は、「弾」が有意に高い得点であった。

表2に、作品ごとの好みの度数分布、および癒し評価結果の度数分布を示す。「紅白梅図屏風」および「燕子花図屏風」においては、ともに12人が好きと回答したが、「作品A」は、4人が好きと回答し、8人が分からないと回答した。癒し評価の結果では、「紅白梅図屏風」において、7人が「かなり癒されている」でもっとも多かった。「燕子花図屏風」において、7

表1 日芸版「癒し」評価スケールの総合得点および下位尺度得点における作品による相違[†]

	総合得点	自己啓発的 エネルギー	治療的 エネルギー	和	極	浄	潤	弾	空
風景写真（対照）	18.3	5.3	7.8	3.3	1.1	3.5	4.3	1.9	4.1
紅白梅図屏風	32.5 **	17.8 ***	14.7 *	5.2 ns	5.3 **	8.1 ***	6.9 ns	2.5 ns	4.6 ns
燕子花図屏風	35.8 **	16.5 ***	17.3 **	6.5 *	4.7 **	8.1 ***	7.4 *	3.5 ns	5.5 ns
作品A（現代作家）	16.5 ns	4.5 ns	9.2 ns	2.9 ns	2.1 ns	1.1 ns	2.8 ns	5.1 *	2.4 ns
F(3) 値 [‡]	14.6	25.9	8.6	9.0	11.1	47.4	11.7	5.1	7.1
p 値 [‡]	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	0.004	<0.001

[†] 反復測定ANOVAによる検定後、Bonferroniの調整を行い多重比較を行った。そのうち、写真（対照）との間の有意差を表示した。

[‡] 反復測定ANOVAにおけるF値およびp値を示す。（調査1、n=15）

*** p<0.001; ** p<0.01; * p<0.05; ns: not significant（有意差なし）

表2 作品ごとの好み、および癒し評価の度数分布（調査1、n=15）

	作品の好み				癒し評価			
	好き	嫌い	分からない	無回答	癒されていない	癒されている	かなり癒されている	すごく癒されている
風景写真（対照）	7	1	6	1	6	7	2	0
紅白梅図屏風	12	0	2	1	1	5	7	2
燕子花図屏風	12	0	2	1	1	7	3	4
作品A（現代作家）	4	2	8	1	9	4	1	1

人が「癒されている」でもっとも多く、4人が「すごく癒されている」と評価された。また、「作品A」において、9人が「癒されていない」という結果であった。

MQL-10の合計得点の平均値は 25.4 ± 5.8 (SD)、身体的健康の平均値は 11.5 ± 2.4 (SD)、および心理的健康の平均値は 11.3 ± 3.5 (SD)であった。これらのMQL-10得点と日芸版「癒し」評価スケール得点との間に有意な関連は見られなかった。

3-2 調査2

調査への参加者は440人で、そのうち日芸版「癒し」評価スケールの全項目が有効な359人(81.6%)を分析対象とした。性別は、男性41人、女性318人で、年代は、20代2人、30代11人、40代40人、50代74人、60代142人、70代80人、80代10人であった(平均年齢 $61.7 \text{歳} \pm 10.9 \text{SD}$)。

総合得点の平均値は 42.4 ± 12.4 (SD)で、6人(1.7%)が「癒されていない」、73人(20.3%)が「癒されている」、144人(40.1%)が「かなり癒されている」、および、136人(37.9%)が「すごく癒されている」と評価された。「自己啓発」の平均得点は 19.9 ± 6.4 (SD)、「治療」の平均得点は 19.4 ± 6.6 (SD)であった。下位尺度については、「和」の平均得点が 7.9 ± 2.3 (SD)、「極」の平均得点が 6.7 ± 2.7 (SD)、「浄」の平均得点が 8.3 ± 2.0 (SD)、「潤」の平均得点が 8.3 ± 2.1 (SD)、「弾」の平均得点が 5.3 ± 2.8 (SD)、およ

び「空」の平均得点が 5.8 ± 2.8 (SD)であった。

MQL-10の合計得点の平均値は 28.7 ± 4.4 (SD)であり、癒し度との相関係数は、総合得点0.29、「自己啓発」0.29、「治療」0.27、「和」0.26、「極」0.31、「浄」0.31、「潤」0.32、「弾」0.18、「空」0.19であった。

性別、居住地、来館頻度は、癒し度およびQOLと有意な関連は見られなかった。芸術文化への関心は、とてもある人が191人(53.2%)、かなりある人が127人(35.4%)、少しある人が40人(11.1%)であった。とても関心があると答えた人は、癒し尺度の総合得点および各下位尺度の得点が有意に高く、QOLも有意に高かった。

年齢においては、「潤」を除く癒し度の尺度(相関係数: 0.13~0.22)、ならびにMQL-10の合計得点との間に有意な正の相関(0.18)が見られた。表3に、年齢を50代以下、60代、70代以上の3群に分けて、癒し度との関連を分析した結果を示す。総合得点、「自己啓発」、「治療」、「和」、「極」、「弾」、「空」において、50代以下よりも70代以上の回答者の方が有意に高い得点であった。年齢群における下位尺度得点の相対値による比較を図1に示す。「極」は、50代以下よりも70代以上の回答者の方が有意に高い相対値であったが、「浄」、「潤」においては、反対に、50代以下よりも70代以上の回答者の方が有意に低い相対値であった。

表4に、MQL-10の得点を26点以下、27~30点、31点以上の3群に分けて、癒し度との関連を分析した結

表3 日芸版「癒し」評価スケールの総合得点および下位尺度得点における年齢群による相違[†]

	総合得点	自己啓発的 エネルギー	治療的 エネルギー	和	極	浄	潤	弾	空
50代以下	39.6	18.6	17.8	7.3	6.1	8.0	8.1	4.6	5.5
60代	42.9 ns	20.0 ns	19.5 ns	8.0 *	6.7 ns	8.5 ns	8.4 ns	5.5 *	5.8 ns
70代以上	45.4 **	21.7 **	21.3 ***	8.5 ***	7.6 ***	8.5 ns	8.5 ns	5.8 **	6.4 *
F(2,356) 値 [‡]	6.0	6.5	7.9	8.7	8.1	2.1	1.2	5.7	3.0
p 値 [‡]	0.003	0.002	<0.001	<0.001	<0.001	0.130	0.303	0.004	0.053

[†] ANOVAによる検定後、Tukeyの方法で多重比較を行った。そのうち、「50代以下」との間の有意差を表示した。

[‡] ANOVAにおけるF値およびp値を示す。(調査2、n=359)

*** p<0.001; ** p<0.01; * p<0.05; ns: not significant (有意差なし)

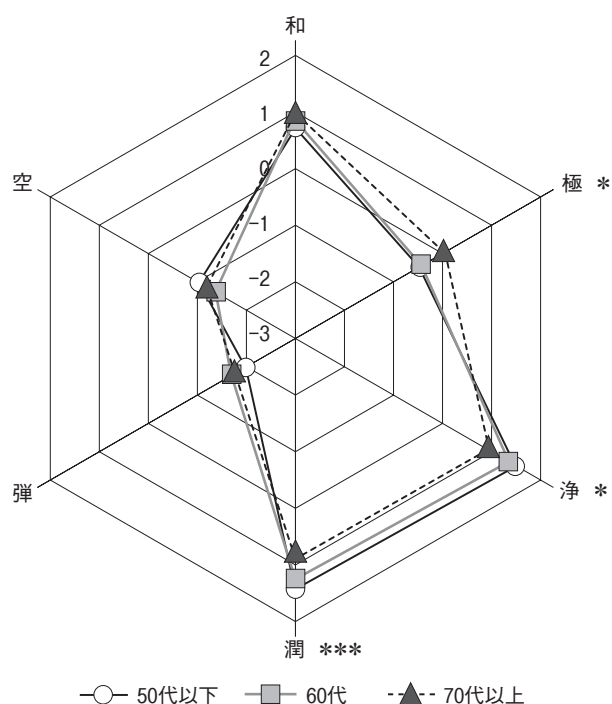


図1 年齢群における日芸版「癒し」評価スケールの下位尺度得点（相対値）の比較

〔相対値〕＝〔下位尺度の得点〕－〔総合得点／6〕
ANOVAによる検定後、Tukeyの方法で多重比較を行った。
そのうち、「50代以下」との間の有意差を表示した。
（調査2、n=359）
*** $p < 0.001$; * $p < 0.05$

果を示す。すべての尺度において、26点以下よりも31点以上の回答者の方が有意に高い得点であった。さらに、「弾」と「空」を除いて、26点以下よりも27～30

点の回答者の方が有意に高い得点であった。

4. 考 察

4-1 個別の作品における癒し効果

調査1では、風景写真を対照として、尾形光琳の二大国宝である「紅白梅図屏風」および「燕子花図屏風」、並びに、光琳の影響を受けた現代作家の「作品A」の癒し評価を行った。光琳の2つの屏風における癒し度が極めて高い得点であったが、これらの歴史的、文化的な価値はもちろん、作品の完成度とその美しさにおいて秀逸である。調査の参加者は専門家ではなく、一般のボランティアなので、これらの作品は一般人の心性に強く影響を及ぼしたものと考えられる。「燕子花図屏風」は、「紅白梅図屏風」より得点が高く、とくに下位尺度の「和」と「潤」において対照の風景写真より有意に高い得点であった。すなわち、「燕子花図屏風」の方が、安心感を与え、リフレッシュできるような治療的癒しが高くなる傾向が見られた。

現代作家による「作品A」は、光琳のデザインの影響を受けた作品と言われている。デザインの共通点はあるものの、作品の持つイメージや鑑賞者に与える効果はまったく異なっている。対照の風景写真との間に有意な違いがあったのは、下位尺度の「弾」であった。「弾」は、2つの屏風においても有意差が見られなかったが、心軽やかな気分という点では「作品A」の効果が大きかった。作品のジャンルが異なるので、2つの

表4 日芸版「癒し」評価スケールの総合得点および下位尺度得点におけるMQL-10得点群による相違[†]

	総合得点	自己啓発的 エネルギー	治療的 エネルギー	和	極	浄	潤	弾	空
26点以下	37.2	17.2	16.9	7.1	5.6	7.4	7.4	4.5	5.2
27～30点	43.0 ***	20.4 ***	19.7 **	8.0 **	6.9 ***	8.5 ***	8.4 **	5.4 ns	5.9 ns
31点以上	45.8 ***	21.7 ***	21.0 ***	8.4 ***	7.5 ***	9.0 ***	9.0 ***	5.6 *	6.3 **
F(2,338) 値 [‡]	14.4	14.6	11.4	10.8	14.6	17.3	16.5	4.5	4.7
p 値 [‡]	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	<0.001	0.012	0.010

[†] ANOVAによる検定後、Tukeyの方法で多重比較を行った。そのうち、「26点以下」との間の有意差を表示した。

[‡] ANOVAにおけるF値およびp値を示す。（調査2、n=341）

*** $p < 0.001$; ** $p < 0.01$; * $p < 0.05$; ns: not significant（有意差なし）

屏風と単純に比較することはできないが、癒しのパターンに違いのあることは明らかである。作品の好みを回答した14人中、2つの屏風を「好き」と回答したのは、ともに12人であったが、「作品A」を「好き」と回答したのは4人であった。「作品A」が好きな鑑賞者における癒し度は高かったため、現代アートが好きなボランティアの集団が癒しを評価した場合、結果が変わる可能性がある。

なお、対照の風景写真は、日芸版「癒し」評価スケールを開発したときに使用した写真の一つで、そのときの総合得点の平均が30.7点であり、写真の中でも比較的癒し度の高い作品であった¹⁵⁾。本調査では、光琳の作品を評価する前にこの写真の癒し度を測定したが(18.3点)、光琳の作品の期待が大きいために過小評価された可能性がある。

4-2 特別展全体の癒し効果

調査2では、光琳アート展全体の癒し度の測定を行い、約8割の参加者が「かなり癒されている」、および「すごく癒されている」と評価された。しかしながら、光琳に関心のある来館者を対象とした調査なので、過大評価される可能性がないとは言えない。神奈川県箱根美術館は、MOA美術館の姉妹館であり、主として陶磁器の展示が行われているが、その来館者を対象に行った調査(2011、未発表)では、281人の総合得点の平均が37.3点であり、本調査の平均(42.2点)はそれを上回っていた。本調査の癒し度が高かったのは、光琳の二大国宝の同時公開の効果、並びに、光琳に影響を受けた多くの作家の作品が展示され、鑑賞者の満足感を高めたものであったと考えられる。

4-3 年代による癒し効果の比較

70代以上の高齢者の癒し得点は、50代以下の人よりも有意に高かった。この結果は、高齢者が美術展を鑑賞したときの満足感が高いことを示唆している。下位尺度の得点(素得点)を見ると、「和」、「極」、「弾」、および「空」について、高齢者の方が有意に高い得点であった。しかし、相対値で見ると、「極」は素得点と同様に高齢者の方が有意に高いが、「和」、「弾」、「空」には有意な違いは見られなかった。「浄」、「潤」

においては、反対に50代以下の相対値が有意に高かった。これらの結果は、年代による癒しのパターンの違いを示唆している。70代以上の高齢者は、光琳アート展によって、「極」、すなわち、自分をより磨き、発展させるエネルギーを感じることが年代の特徴と考えられる。高齢者においては、アンケートの回答が過大評価されている可能性があり、素得点の評価だけでなく、相対値による評価が解釈を容易にした。

前出の児童書画の研究¹⁸⁾では、癒し度の下位尺度のパターンにおいて、50代以上の回答者と児童との間に違いがあったが、本研究では子どものデータを収集していないので、確認できなかった。なお、子ども、および高齢者に対する尺度の信頼性と妥当性は、質問の意味をどこまで理解できるかという点も含めて、別途検討する必要がある。

4-4 癒し効果におけるQOLとの関連

癒し度とQOLとの間に正の相関が認められた。このことは、美術展を鑑賞することにより、心理的な満足感が生じて、QOLが向上する可能性を示唆しているが、QOLの高い人が癒される傾向があるという解釈も可能である。因果関係を明らかにするために、縦断的な調査や介入研究が必要である。芸術には嗜好性があるので、対象者自身の興味のある分野が効果的であるかもしれない。本研究では、10項目版のQOL尺度を使用しているため、癒しと関連するQOLの領域については検討することができない。

癒し尺度とQOL尺度は、内容や構成概念はまったく異なっているが、ともにポジティブな心理状態を反映しており、相関が生じやすいことも考えられる。本研究では測定していないが、ウェルビーイング、スピリチュアリティ(霊性、または精神性)、レジリエンス、自己効力感、幸福感など、ポジティブな心理尺度の中で、どれが強い関連を持っているか、興味深い今後の課題である。

4-5 高齢者における美術品鑑賞の効用

美術館の役割として、作品の保存と展示、文化や歴史の継承、来館者の心理的効果や満足感、情操教育などが考えられるが、緒言に本研究の背景として記した

ように、高齢者に対する効用も重要と考えられる。英国の王立公衆衛生協会²⁴⁾は、芸術や博物館の重要な役割として、個人の精神的な健康管理だけでなく、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）や弾力性のあるコミュニティの形成によって社会的孤立を抑制することが期待されている。内田篤呉⁸⁾は、「アートが果たす役割は教育に止まらず医療、福祉、地域社会の活性化でも成果が認められる。ニューヨーク近代美術館の進める鑑賞プログラム²⁵⁾は、認知症抑制に効果があると報告され、高齢者の生き甲斐やソーシャル・コミュニティの形成にも有効である。」と述べている。本研究の結果においても、多くの高齢者が美術館を訪れ、美術品を鑑賞して癒されていることが明らかになっており、この記述を裏付けている。

4-6 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、来館者を対象にしているため、美術に関心の高い人に偏っていることである。とくに尾形光琳の特別展の来館者なので、日本美術に関心の高い人が多く含まれている。これらに関心のない人が、美術品にどれくらい癒されるか、今後の課題としたい。また、性差はなかったものの、男性の回答者が少なかったため、性別による下位尺度のパターンの違いは検討できなかった。しかしながら、56年ぶりの光琳の二大国宝の同時公開という貴重な機会にデータを収集し、分析できたことは意義深いと思われる。この調査結果は、美術展の癒しを一般化することはできないが、今後の研究を進める上で大きな布石になると考えられる。

謝 辞

本研究を行うに当たり、MOA美術館のスタッフ、および一般社団法人MOAインターナショナルの関係者に感謝いたします。

なお、本研究の一部は、第82回日本応用心理学会大会（2015、東京）で発表した。

[参考文献]

- 1) 内閣府. 平成26年版高齢社会白書（概要版）.
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/index.html>, (アクセス日：2015年8月31日)
- 2) 藤田幸司, 藤原佳典, 熊谷修ほか. 地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴. 日本公衛誌. 51, 168-180. 2004
- 3) 水野映子. 高齢者の外出の現状・意向と外出支援策. ライフデザインレポート2004.9. 第一生命経済研究所. 東京. 4-15. 2004. <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp0409.pdf>, (アクセス日：2015年8月31日)
- 4) 文部科学省. 平成17年度 誰にもやさしい博物館づくり事業 高齢者対応. http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1298822.htm, (アクセス日：2015年8月31日)
- 5) Dodd J, Jones C. Mind, body, spirit: How museums impact health and wellbeing. School of Museum Studies, University of Leicester. Leicester, UK. 2014. <http://www2.le.ac.uk/departments/museumstudies/rcmg/publications/mind-body-spirit-report>, (アクセス日：2015年8月31日)
- 6) 文部科学省. 社会教育調査. http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/index.htm, (アクセス日：2015年8月31日)
- 7) MOA美術館. <http://www.moaart.or.jp/>, (アクセス日：2015年9月9日)
- 8) 内田篤呉. 光琳ART：光琳と現代美術. 角川学芸出版. 東京. 2015
- 9) 尾形光琳. 紅白梅図屏風. <http://www.moaart.or.jp/collection/japanese-paintings54/>, (アクセス日：2015年8月31日)
- 10) 尾形光琳. 燕子花図屏風. <http://www.nezu-muse.or.jp/jp/collection/detail.php?id=10301>, (アクセス日：2015年8月31日)
- 11) 根津美術館学芸部. 燕子花と紅白梅：光琳デザインの秘密. 根津美術館. 東京. 2015
- 12) 重野純. 音の世界の心理学. 第2版. ナカニシヤ出版. 京都. 2014
- 13) 谷口高士. 音は心の中で音楽になる：音楽心理学への招待. 北大路書房. 京都. 2000
- 14) 松本洸, 秋元貴美子, 佐藤清公ほか. 「癒し」の心理尺度の作成：芸術に対する「癒し」測定スケールを求める. 平成14・15年度日本大学学術研究助

- 成金<総合研究>日本大学芸術学部研究プロジェクト「芸術と癒しの基礎的研究」報告書. 日本大学芸術学部. 東京. 23-48. 2004
- 15) 松本洸, 秋元貴美子, 高久暁. 日藝版『「癒し」評価スケール』の完成. 平成16年度日本大学学術研究助成金<共同研究>日本大学芸術学部研究プロジェクト「芸術と癒しの調査研究」報告書. 日本大学芸術学部. 東京. 105-115. 2005
- 16) 松本洸. 日本庭園の癒し評価スケールにおける特徴: 西洋庭園との比較を含めて. 日本大学芸術学部紀要. 55, 57-63. 2012
- 17) 内田誠也, 岡田雄太, 木村友昭ほか. 庭園や美術品の鑑賞による癒しが人の心理や生理に及ぼす効果. MOA 健科報. 16, 31-39. 2012
- 18) 内田誠也, 木村友昭, 岡田雄太ほか. 「癒し」評価スケールを用いた児童書画鑑賞による癒し: 3つの年齢群間の特徴について. MOA 健科報. 18, 67-72. 2014
- 19) 中川祥治, 菅原啓順, 池田俊一ほか. 大規模ヒマワリ畑の景観が人に与える癒し効果. MOA 健科報. 18, 53-65. 2014
- 20) 内田誠也, 岡田雄太, 山岡淳ほか. 東京療院における健康プログラムのストレス緩和効果について. MOA 健科報. 17, 21-30. 2013
- 21) 木村友昭, 鈴木清志, 森岡尚夫ほか. 大規模健康調査のためのQOL尺度開発とその妥当性の検証: 10項目版MOAQOL調査票 (MQL-10). MOA 健科報. 13, 73-84. 2009
- 22) 木村友昭, 鈴木清志, 内田誠也ほか. MOAQOL調査票 (MQL-10) の反応性および最小有用差異の検討: 岡田式健康法における12週間追跡調査の結果より. MOA 健科報. 16, 55-64. 2012
- 23) Kimura T, Suzuki K, Uchida S, et al. Responsiveness and minimally important difference of a generic quality of life measure for complementary health practices. *Altern Med Stu.* 2, 59-63. 2012
- 24) Royal Society for Public Health. Arts, health and wellbeing beyond the millennium: How far have we come and where do we want to go? 2013. <https://www.rsph.org.uk/en/policy-and-projects/areas-of-work/arts-and-health.cfm>, (アクセス日: 2015年8月31日)
- 25) The Museum of Modern Art. The MoMA Alzheimer's Project. <http://www.moma.org/meetme/index>, (アクセス日: 2015年8月31日)

Psychological Healing Effects of Art Appreciation at the Special Exhibition Commemorating the 300th Anniversary of Ogata Korin's Death: Associations of Healing Level with Participants' Gender, Age, and Quality of Life

Tomoaki KIMURA¹, Ko MATSUMOTO², Seiya UCHIDA¹ and Kiyoshi YAMAOKA¹

Abstract

In February 2015, the special exhibition commemorating the 300th anniversary of Ogata Korin's death was held at the Mokichi Okada Association (MOA) Museum of Art in Shizuoka, Japan. This study investigated whether healing levels after art appreciation at the exhibition were associated with participants' gender, age, and quality of life (QOL). Healing level was evaluated using the Healing Scale developed by the Nihon University College of Art, and QOL was assessed using the 10-item MOA Quality of Life Questionnaire. In Survey 1, the healing levels of 15 participants after appreciation of two national treasures by Korin, a modern work of art, and a landscape photograph (control) were measured. In Survey 2, the healing levels of 440 participants after appreciation of all exhibits were measured. In Survey 1, significantly higher healing levels were observed for two Korin's artworks. The results of Survey 2 demonstrated that the healing levels were not significantly associated with gender, but were positively associated with age and QOL. Museums are designed to encourage individuals, particularly older adults to leave their homes and to derive satisfaction from art at museums. This aim was supported by the results of this study.

Keywords:

art psychology, healing scale, quality of life, elderly individuals, Japanese art

¹MOA Health Science Foundation, 1-1-60 Nishi-Atami, Atami, Shizuoka 413-0038, Japan. ²Nihon University, Graduate School of Art, 2-42-1 Asahigaoka, Nerima-ku, Tokyo 176-8525, Japan.

Corresponding author: Tomoaki Kimura, Ph.D. TEL: (+81)557-86-0663, FAX: (+81)557-86-0665, E-mail: t-kimura@mhs.or.jp

Received 23 August 2015; accepted 29 August 2015.